

【97】矢切の渡し

モータリゼーションの始まる前、人々が歩いていた時代には、河川の兩岸を結ぶ渡し船、渡船（とせん）はごく普通の存在でしたが、現在では橋が沢山架かって渡し船は激減しました。

東京では、東端の千葉県との境界を流れる「江戸川」の「矢切の渡し」がたった一つ残った渡し舟だといいます。（注1）

「矢切の渡し」というと、細川たかしの歌で流行した歌謡曲の題で御存知の方も多いかと思いますが、実在の渡し舟で、東京都葛飾区の“柴又”（しばまた）と江戸川の対岸の千葉県松戸市の“矢切”（やぎり）との間の中 150mほどの水面を往来しています。兩岸の堤防と堤防の間の距離は 500m もありますが、高水敷が広く水面巾は狭いのです。江戸時代以来の歴史のある渡し舟で現在もその伝統を引き継いでいる船頭さんが松戸市の囑託を兼ねて営業しています。柴又は昔は帝釈天（たいしゃくてん）の寺があるくらいの小さな集落だったのですが、一世を風靡した映画シリーズ、山田洋次監督、渥美 清主演の“男はつらいよ”の舞台として有名になりました。廃止の瀬戸際にあった「矢切の渡し」も観光名物としてお客が増えてきてどうやら存続できそうなので一安心です。

実は、歌謡曲「矢切の渡し」が作られた裏話しがあります。「矢切の渡し」が廃止されそうだというニュースを聞いた作曲家の船村徹と作詞家の石本美由紀の二人が、渡し船の存続への応援のために歌を作ったと、NHKの番組で語っていました。船村氏は栃木県塩谷町の鬼怒川のほとりで、石本氏は広島県大竹市の小瀬川（おぜがわ）のほとりでそれぞれ生まれ育ち、河川には深い愛着があるそうです。（注2）船村氏が「矢切の渡し」の現地を訪れたときの言、“川岸に引き上げられた船が干物のように並べられていた・・・”が印象的でした。矢切といえば、明治の小説「野菊の墓」（伊藤左千夫著）の舞台で「矢切の渡し」も顔を出すのですが、いずれ機会をみてお話しします。

（注1）地図中心（No 602）、2022年11月、日本地図センター

（注2）小瀬川は現在の一級河川名で、以前は広島県側では木野川（このがわ）と呼んでいました。